

---

## 3 2 R 紅き牙獅子は転送事故に啼く

二代目斬風

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

3 2R 紅き牙獅子は転送事故に啼く

### 【Zコード】

Z5515Z

### 【作者名】

一代目斬風

### 【あらすじ】

何の因果かメタルマックス3の主人公に生まれ変わってしまった転生者。気付きもしなかつた過酷な宿命に翻弄され、時には自由のために、時には女のために、何よりもクソ美形 グラトノスへの復讐を果たすためにと戦い、そして自らの因縁に決着を付け、ジャガーンナーの転送装置から緊急脱出したはずだった……のだが、何の因果か2Rの舞台へ転送事故だと!? そんなバカな!

## 〇〇話 ふるわーぐ的なモノ（前書き）

- ・MM2Rをやってたら転送装置からヤツジが出てきたのでムリムリにしてやつてしまつた。
- ・こじらは氣楽に一人称ベースで書き殴つて行きたいと思ひます。
- ・ぶつちやけテンプレでスマンこじつてす。

## 〇〇話 ふるるーぐ的なモノ

息を切らせながら、セキュリティが死んだ艦内を全力で走る。

俺と共に、恨み骨髄の怨敵<sup>グラトノス</sup>と戦い続けてきた相棒も、既に甲板へと放棄された。

何者の意図か、この荒れ果てた世界で唐突に”前”の記憶に目覚め、自分勝手に地獄へと突き落とされたかのように思い込みながら荒んだ少年時代を送っていたという、何とも黒歴史溢れる頃からの相棒だったが目的地である転送装置の場所にまでは連れて行けない。

奴によって化け物<sup>ブレード・トゥース</sup>へと変えられた俺も、流石に車載兵器と装甲タイルでゴテゴテに武装したクソ重い相棒を担ぎ上げて人間用の梯子を登ることはできないし、そもそも如何に特殊合金製であろうとはいえ、人間用に作られた梯子がこの世界の在り得ない重量を誇る戦闘用車両の重さに耐えられるとは思えない。

親交のある芸術家<sup>アーチスト</sup>に、目の玉が飛び出るほどの報酬と、極めて入手の難しい超希少金属<sup>スーパー・レア・メタル</sup>を提供する事で、超改造に超改造を重ねてもらつた二つの超兵器を愛車<sup>7.7mm機銃モールバッケージ</sup>こと失うのは血の涙を流すほどに口惜しいが仕方が無い。

ないない尽くしの中、相棒に固執したあげくトゥアハー・デ・ダン級の巨大潜水艦<sup>ジャガント</sup>の自沈に付き合わされ、原子炉とガスター・ビンの大爆発に巻き込まれるなどノーセンキューである。

俺も、色々と物理常識を吹っ飛ばしている自重<sup>メタルマックス</sup>しない世界の住人

とは言え、流石に水圧に潰された拳銃、核爆発と水蒸気爆発に巻き込まれながらギャグ時空よりしくアフロになるだけで済むとは到底思えないからな。ここはグラトノスの目的を潰して全てを御破算にしてやつた代償として諦めざるを得ない。

世界に蔓延<sup>はび</sup>する悪党どもやくノア」と戦うための切り札にもなるであろう。ジャガンナー<sup>ト</sup>を、グラトノスの目的を潰すためとはい破壊してしまったのは極めて遺憾だが……まあ、済んでしまった事は仕方が無いよね！

赤色灯が点滅し、自爆カウントダウンを読み上げる電子音声と、非常事態を示す警告音が渾然と響き渡る廊下を駆け抜け、非常時の脱出用であらう転送装置のある小部屋へと飛び込む。

艦内を徘徊していたバイオモンスターの姿も今や見えない。破滅を決定付けられた艦から逸早く逃げ出したのであらう。

「うとと、じじだ……転送準備スタンバイ。急げ、急げ……」

慌てず、しかし急いでコンソールを操作する。行き先は慣れ親し  
んだワラの町。指定アドレス

完全に内部の電源が死ぬ前に、転送プロセスを終了させなければ  
ジ・エンドだ。

緩やかに……だが確実に傾斜を始めた船体によって装置から放り  
出されないように必死でバランスを取りながら、ただただ祈る。

そして、装置が遂に翡翠色に輝き、テスラコイルが猛然とプラズ  
マを放ち、とうとう時空間を貫くワームホールが顕現する。

( 生き延びたッ！ やまあみやがれグラトノスッ！ )

転送される時の閃光と、自意識が遠くなるような感覚に包まれな  
がら、俺は内心で勝利の雄叫びをあげたのだった。

<ERROR!  
<ERROR!  
<ERROR!

<転送中――予期セヌ障害ガ発生シマシタ！

もちろん、俺がこの残念な事実を知るのは後の事になつたのだが  
……何故だ！ あれか？ 生き延びたッとか思つたからフラグでも  
立つたといつのか！ ド畜生！

まあ、こいつは締まらない理由で、俺は『ジヤッジメント・バレ  
ー』から強制的にオサラバさせられてしまったのである。

01話　「これはどうですか？」（前書き）

主人公（笑）揃い踏み

「…………ん？」 は、 どうだ？ ワラに戻った……訳では無せそう  
だな」

眠りから覚める前のような浮上感と共に、転送後の見当識喪失から復帰した俺は、自分でも判るであろう程に怪訝な表情だったに違いない。

沈み逝くジヤガノートから転送装置で無事に脱出できたはよいものの、周囲を見てみれば何時ものガレージ地下のコンクリ部屋では無く、床にはハイ・セラミクス製と思われるタイルが敷かれており、壁も鉄板による補強。送電パイプもワラのそれと比べると劣化が薄いように思える。

近くに置かれている神話公司製の管理端末も見慣れたものではなく、何よりもそこには俺のほうを見て、驚きの表情を浮かべている金髪青眼の少女がいた。

「あ、あんた誰！？」

「オーケー、落ち着け金髪少女。ひょっとして転送は初めてかい？」

まだ焼てる時聞じやない……ひまかつてやー一元こいつに聞いてみ  
。

黒いレザービキニと、隠す気があるのかと疑問を感じるレベルのこれまた黒いレザースカート。トドメとばかりに絶対領域を演出する膝上までの黒いサイハイソックス。

無法の荒野を往くような女性としては明らかに問題であろう、露出過剰な服装を、臍脂色えんじをしたハンター御用達の外套コートで隠している。年季の入ったそれは随分と長らく愛用しているのだろう。所々が破れ、あるいは焦げ付き、片袖など肩口から無くなってしまっているのに、みすぼらしい印象は無く、むしろ歴戦の風格すらあった。

肉体的には、スレンダーながらも出るべき所は程よく出ており、出て欲しくない部分は薄らとついた筋肉によって余分無く引き締めているという、妙齢の女性が見たら嫉妬に駆られそうな若さに溢れる肢体。

腕は細身ながらも弱さを感じさせず、すらりと伸びた脚はまるで力モシカの如くという比喩表現がよく似合つ。

まるで太陽のような生命力に満ちた勝氣（重要）そうな美少女（重要）が、あんな衣装を着こなしている……そうなると、つまり、まあ、何だ。若さ溢れる肉体を持つがゆえに、視姦（ヤニヤ）してしまいたくなる気分も判つて貰えると思う。

「……何だらう。凄く目付きが気に入らないんだけど？」

「そいつは失礼。だが生憎これは生まれつきでね。それは兎も角、俺はジン。恐らく転送事故でここに来た。悪いがここはどこの町なのか教えてくれないか？」

「そういう意味じゃないんだけど……まあいいわ。私はレナ。それで、ここはヘルニアヨの地下よ。あんたは私が転送装置の電源を入れた途端に出てきたの」「

なるほど。そりやあ驚きもするわな。

電源を入れたと思つたら急に作動して、顔に刺青（？）した男が

出現などしたら普通は驚く。むしろ悲鳴を上げなかつただけ凄いか  
も……

「……つて、エルニーニョーっ」

「やう。エルニーニョ」

エルニーニョつて……俺の記憶が確かなら、いわゆる「作田で出で  
きた場所だよな？」つまり「大破壊」後な地名では、アシッドキヤ  
ーオン。

過去、地球救済プロジェクトのために日本に移住したバイアス・  
グラードが日本のとある山間地を買い上げ、計画研究都市<sup>バイアスシティ</sup>や別荘や  
自然エネルギー開発やら石油生成プラントやら当時でも騒ぎにな  
るようなレベルの事業をアレコレやらかした場所、とクソ美形に洗  
脳されていた頃に聞いた記憶がある。

一応、文明が維持されていた時代からの転生者である俺は、そこ  
そこにインテリだつたせいで、クソ美形に気に入られ、冷血<sup>クラトース</sup>・<sup>「ホールド・ブラック</sup>党時代  
に、吐き気がする事極まりない研究の助手として扱われたりく大破  
壊<sup>クラトース</sup>→前の科学技術や歴史を学ぶ機会に恵まれた訳だが、それでも奴  
に感謝の念など抱きたくも無い。

まあ、俺の過去など、この際どうでもいい。

そして、諸君（？）も今の話で気がついたと思うのだが……そう、  
ここって日本なんだヨネ。んでもって、今まで俺が生きてきた今生  
の故国はユナイテッド・ステイツ。わお、大陸を跨いで転送事故と  
かありえなーい！

内心で激しくテンパっているが、微妙に鉄面皮を維持する我が面

貌。とりあえず少女……いや、レナに礼を言いつつ端末を調べる。

「で、何してんの？」

「……転送履歴を調べてるんだよ。普通は転送事故が起こっても履歴を辿ったり、改めて目標場所のアドレスを入力する事で戻れるからな」

「へえー。そーなんだ」

「そーなのだ。残念な事に俺らが使つよう転送装置では、電力の都合もあって行ける距離が制限されているけどね……ちなみに大破壊→前の首都近郊には国際転送ターミナルってのがあつたらしくて、その転送装置なら海を越えて別の大陸とかにも一瞬で行けたらしいよ。まあ、使うためには厳しい審査と馬鹿みたいな高額料金を取られたそうだけどな」

「ふーん」

「ぶつちやけ、信じられんイレギュラーで大陸を越えたようだ……この転送装置では出力不足で帰れないという衝撃の事実が判明した！」

「その割には余裕そうね……ま、『愁傷様と言つておくわ

』』愁傷様の割には、慰める気など無いと言わんばかりの態度のレナ。正直、俺としても慰められるとマジなレベルで落ち込みそうだから助かる。

今回の原因は、要するに自爆間近のジャガソナートが内部電装系や転送装置のキャパシタに過剰な電力を流し込んだせいだろうと考えている。

どちらにしても、対ノア兵器の出力を以つてして正に地球の裏側といった距離を越えさせられてしまったのだから、どうしようもない。

帰るためには、件の国際転送ターミナルが生きている事を期待しつつ、大破壊後<sup>くず</sup>の荒野を流離<sup>さり</sup>探す必要があるだろう。飛行機や巡洋艦的なものを探すのも手だが、正直な所、メイド・イン・ノアの巨大生物兵器とか浮遊要塞とか訳の分からぬキワモノに狙われるような気がしてならない。

どうやら、どのような選択肢を選ぶにしろ、俺はこの地でハンターとして活動しないとならしいようだ……

「つか、俺の戦車コレクション……無事なんだろうか」

猛烈に不安だが、向こうには無線ポストも無い以上、手の出しうが無い。衛星システム経由ならハンターオフィスに連絡ぐらいは取れる……か？まあ、取れたとしても、帰るまでに長い時間が掛かるようならオフィスのほうでレンタル連合あたりに運用させるんだろうなあ。

ハンターオフィス預かりになってしまえば、幾らエンジンロックに起動キー、コニットによるセキュリティが施されても、改造屋にヤツてもうつんだらうし……ああ、くわつ、気になつてたまらん！

何？「コーラやシセちゃんに連絡を入れないのかつて？期待させて済まないが、あの頃はグラトノス対策に集中し過ぎたせいで、コーラとの熱いラブロマンス……なんてネチョい要素など入り込む余地が無かつたんだよ！」

シセちゃんにしても、相棒チヨッパーがミンチの所のイゴールに俺ごと回収されたせいで、バイク引き上げの事故から身を挺して助けるなんてヒロイックな展開も無かつたし、むしろ関係性そのものが薄いわ！

ああ、なんかもー、言つてるだけで悲しくなつてきた……

へん！いいさいいさー！こうなつたら、こつちでも人が羨むような戦車コレクションを集めてやるんだからな！

ちなみに……あのレナという少女が「原作」の主人公に当たる存在だという事を知つて愕然とするまで、あと少し

## 0-1話　「Jリマジニアですか？」（後書き）

・ いつも簡単に帰つても「ひりひり」困るので「転送装置の設定を捏造（爆）」

## 02話 はんたーはんたー（前書き）

・「Jの少女……実に腹黒い（笑）

## 02話 はんたーはんたー

side レナ

修理工のナイル爺さんが、ガルシアのバギーを修理するって言ってエルニーヨまで行つたと聞いてから歩きで半日。

あの田の記憶に苛まれながら悶々としていた私は、リハビリと修練がてらに雑魚を狩りながらエルニーヨまで足を伸ばしていた。流石に生身でスナザメと戦う気なんて無かつたので砂地には近づかず、ハトバ方面との辺りを分断する渓流沿いに、北上すること20～30km……何とか日暮れ前に到着してホツとしたのも束の間。

エルニーヨはグラップレーの連中が我が物顔で闊歩していました。どうせっ！

つて、ふざけんじゃないわよッ！

マリアとマドに向かつた時は、急ぎの依頼だつた事もあつて、エルニーヨに寄らず直行だつたから気付かなかつたのね……ガッデム！

町中は荒らされてまではいなかつたものの、腐れ野郎どもがやりたい放題……宿屋で一泊しようかと思つたら、受付では「えへらえへら」と気持ちの悪い笑みを浮かべているグラップレーの連中が何故か立つてゐるし、私のようなつら若き美少女が一人で泊まれるなんて環境じや無い事は明白だつた。

諦めて酒場で夜明かしでもしようかと入つてみれば、やっぱり連中が酒盛りしてやがる。それだけでも飽き足らず、外ではチンピラとしか言つようの無い下つ端が、どこかのオッサンを恐喝してゐるわ、

汚いモノを曝け出して堂々と立小便しやがる汚物野郎までいやがる

始末！

思わずマリア直伝の必勝の法則で殴り飛ばしたくなつた……とい  
うか、むしろ私の得物で消毒してやろうかとすら思つたぐらいだ。  
何にしても、あんな連中の同類に私の両親やマリアが殺されたの  
かと思うと憤死したくなるぐらこの怒りに駆られてしまつたうにな  
るが、必死に抑えた。抑えきつてやつたわ。

……まだ早い。コイツらを掃除して、台所の黒光りするGのよう  
にいる有象無象どもを蹴散らして、あの怪物をマリアと同じよう  
にテッド・ブロイラー<sup>殺</sup>チャグチャのケチヨンケチヨンのケシズミにしてしまえるだけの  
力を蓄えるまでは我慢だ。

喧嘩で殴り飛ばす程度なら兎も角、町を支配しているグラップラ  
ーを見る端から駆除してしまつては、それこそ草の根を搔き分ける  
かのように狙われ続けて、ネズミのよつに身を隠さなければならな  
くなつてしまつ。そうなればマリアや両親の仇を討つなど夢物語に  
なつてしまつだらつ。

そう、自分を誤魔化しながら、私は安全そつな仮宿を探す事にし  
た。  
説得

……驚いたつてもんじゃなかつたわよ！

ええ、私が何を言つてゐるのか判らないかもしない。だから、  
大破壊>前から受け継がれてきたお約束を言つわね？

仮宿を諦めて、転送装置を使ってイリットちゃんの所に戻ろうと思ひ、転送装置の電源を入れたら、何も操作してないのに、どう見てもヤバい系統の人が転送されてきた……な、何を言つてゐるのかわからねーと思うが、私も何がどうなつたのかわからなかつた……

「あ、あんた誰！？」

だから、私が思わず上擦つた声で誰何してしまつたのは仕方ない事だと思つた。

そいつは、炎のように鮮やかな真紅の髪と、紅玉石のように透徹していながらも何故か鮮血のイメージを抱かせる赤い眼をした男だった。

顔立ちはそれなりに整っているけど、いり……何と言つか、仏頂面が張り付いてしまっている感じで、言いつてる台詞の軽さの割に表情の変化が乏しい。慣れないと怖さを感じるタイプね。

何の飾りか呪いかは判らないけど、右目を経由するように一本。左目側には三本の赤いラインが走っている。そのラインが気付けないほどに微かにだけ、薄らと発光しているように見えるのは私の気のせいだろうか。

目にかかる髪の毛が邪魔なのか、額にはくすんだ緑色のバンダナ。痩身に見えるくせに、服の下からでも判別可能なほど鍛え上げられた身体には迷彩スースに怪力手袋、とどめにクラッシュブーツ……

何でことなの……バンダナは別として、他は全部高級品じゃない！ あ、よく見るとボロボロに見える外套も戦車長仕様のビンテージい？ 考えてみれば持つてる武器も強そうな軍用銃だし……何？ これつてモヒカン怪人に装備を焼き尽くされて、泣く泣く散弾銃ショットガンとアサルトナイフで頑張ってる私に対する挑戦か！ 挑戦なのね！？

「……何だろう。凄く目付きが気に入らないんだけど？」

ふと気がつけば、互いに無言でお見合いしているような状況となつていてる事に思い当たり、私は機嫌を悪くしたかのように振舞つてみた。

が、彼は別に気とした様子も無く軽口交じりに肩を竦めて見せる。もう……何か腹が立つけど、私も都合の悪い事は忘れないで流す事にした。

彼の主張を信じるとするなら、彼……ジンは転送事故によつて別の大陸からエルニーヨまで飛ばされてきたそうだ。

普通ならすぐに帰れるんだけど、大陸（つて何？）を越えるような転送事故はイレギュラーだそうで、私達が使うような転送装置では帰れないらしい。

ジンの説明には多分に専門用語らしきものが混じついていたので、私に理解できる部分だけを纏めたり上のようになつた。

うはは。まあいいのよー。私は専門家じゃないんだから。  
それに、眞実か虚言かはこの際どうでもいいかもしない。

むしろ偶然とはいえ、凄腕つぱいハンターと知り合えたんだから、ここは色々と世話を焼いておいて、彼には私の復讐を手伝つてもらおう。

まだ少ししか話していないけど、それでも彼の本質には私に通じるナニカを感じるし、外道や悪党の類でも無さそうだから。

マリアのように無条件で信じられる訳でもない。

フェイさんのように義理堅い訳でもない。

アパッチさんのように口の矜持を持ち合わせている訳でもない。

それどころか、近くにいると逆に身の危険を感じそうな賞金稼ぎモドキとチームを組むより万倍マシだろうし、私のような歳若い女

ハンターに対する態度にしても外見に反して柔らかい。

時に視線にやらしいモノが混じつている気もするけど、今までに見てきた連中と比べれば紳士的な範囲内だし、過剰に嫌悪感を抱かせるような生々しい感情も飛ばしてこないし……あれ？ もしかして、これ……超優良物件？

どこかで実力が近くて、気の置けなさそうな同性のメカニックやソルジャーと組もうと思つてたけど、もうこれは天佑だよねっ！

フフフ……絶対にオとす……フフフフフ。

02話 はんたーはんたー（後書き）

・けだものハンターをハンター少女がハンターするやつです

〇 3番 1-5? なにがおこなっている? (前書き)

・「一む、短い。まあ繋ぎみたいいなものって」と。

## 03話　T-S?　なにそれおいしいの?

（おおう、何だか妙な悪寒が……）

あれからレナに話を聞いたところによると、現在このHルーニョはグラッブラーが幅を利かせていて碌なものじゃないらしい。宿泊施設ではまず確実に人攫いでも企んでいる勢いだし、町を歩いているだけで厄介事に巻き込まれたりする可能性が高いとか。なんとまあ、一子相伝の暗殺拳を伝承している世紀末救世主が放浪している世界かと突つ込みたいレベルの混沌ぶりである。

ある意味で原作通りなのだが、あらためて聞くと本当にとんでもない世紀末っぷりだ。

「もう夜が近いし、よければ一緒にマドまで来ない？ タダで……しかも安心して休める場所があるわよ」  
「……マドか。どの辺りになるんだ？」  
「エルニョから南西に向かつて川沿いに20～30kmほど行った所にあるわ。ま、私のエゴーグルに地図情報が記録されているから転送装置で直ぐ戻れるけどね」

それとも、転送装置を使うのが怖いならレンタルタンクでも借りて行こうか？ と小悪魔的な表情で問い合わせるレナに「転送で構わないさ」と答えて苦笑する。

事実として、今回の大陸間を越える誤転送はジャガソナートが原因で間違いは無い筈だ。エルニョの転送装置が突然どこからか莫

大な電力を受信して暴走する……というイベントの発生率など寸毫の確率ですらあるまい。

「ふーん。ま、いいけどね」

からかうという思惑を外したか、少しばかりガツカリとした様子のレナが装置端末を操作し始める。

俺は、その様子を眺めながら「なに、レナも転送を使ってたら何回も事故に出くわすだろうから自然と慣れるさ」とニンマリとしながら付け加えたのだった。

「……ついたわよ」  
「事故が起こらなくて残念だつたな？」  
「くううう……ムカつく…」

先程の[冗談に加え、俺という転送事故の実例がいたせいか、レナは奇妙な緊張感を醸し出しながら転送ポッドの台座から降りる。当たり前だが、転送事故はそう簡単に発生するものではない。仮

ここで事故が発生していたら、俺は真剣に言霊の存在を信じただろ。

転送事故をネタに軽くからかつた心算が、逆にからかわれる破目になつたレナは地団駄を踏みはじめそつた勢いで憤慨していたが、「……これで勝つたと思わないことね！」と指を差して宣言していた。実際にからかい甲斐のあるやつである。

転送装置が設置されている地下室から階段を上ると、そこはボロボロに朽ち果てた廃墟手前のビルの中だつた。

レナの言つた通りに日も暮れかけており、隙間から見える空は夕陽の赤を通り越して、宵の群青に差し掛かっている。

そもそも店仕舞いにでもする氣か、人間道具屋の店主であろう青いツナギを着込んだ男が売り物が納められた木箱に鍵をかけてまわつていた。

「この建物はマドで一番古いんだつてさ……まあ、イリットの受け売りなんだけどね」

ひらひらと手を振りながら触り程度に説明し、ツナギの男に会釈

だけを済ませると、扉自体が失われたのかポツカリと開いたままの出入り口をぐぐつて外へとでる。

進入禁止用の黄色い車止めをすり抜け少し歩くと、そこにはちよつとした町工場といった規模のガレージが建っていた。

薄暗い町中において、文明の光に照らし出されたソレは近くに立ち寄った人間に、強い安心感を与えてくれる事だろう。

「はい。ここよ。私もお世話になってるナイル爺さんのガレージ。一階に大きめのロフトがあるから、今日はイリットに頼んで泊めてもらいましょ！」

俺のほうを振り返つて、満面の笑みで両手を広げるレナ。

もはや疑問を抱く余地もない。

彼女が、この地を巡る復讐劇の主演女優だったのだ……

……え？ これってＴＳ？？

03話　—S? なにそれおにじーの? (後書き)

- ・ジンさんはMM2Rの事など知らなかつたのだ!  
たぶん(笑)
- ・次回、いきなり男を連れ込むレナにイリットが!  
……嘘です。  
すンません。

## 04話 むつまーいがつかべかみ（魔術師）

戯言・今日は1話だけ。「むむ……やんやんお嬢様者の中にも進めるべきか?

- ・ジンちゃんが仲間になつた!
- ・ジンちゃんの無理ゲー回想録（あ

## 04話 むりげーにつけやぐすみ

「「「」」ちやうさまでした！」」

「はい お粗末様でした」

宿を貸してもらひた上に、心の籠つた手料理まで頂戴させてもらつた俺とレナの感謝の挨拶が重なる。

そんな俺達を、どこか微笑ましさすら感じさせる眼差しで見てから感謝の言葉を受け取ると、彼女……イリットは年季の入つたシンクで洗い物を始める。

正直、この生き馬の糞を抜くといつレベルを超えた弱肉強食の荒野において、ありえねーと叫びたくなるほどに純粋で人の好い娘さんだつた。

最初は、どうしても原作のイメージを抱いていたせいか、黒い二

又のおさげ髪に浅黒い肌の彼女を見て、イリットだという認識を持つのに苦労したが、もうそんなの関係ないねッ！ 原作だの関係無く彼女は良い娘だと、このブレード・トゥース様が認定するがおーんッ！

……うん。昨日みたいにイメージからかけ離れたイリットをガン見し過ぎて、イリットを脅えさせるのは困るからな。

まるでイチャモンを付けるヤクザと脅える美少女といった光景に、空気を読んでくれたレナが、切れの良いツッコミを炸裂させてくれなければ今頃どうなつていた事か。

くつ、初対面の割りにレナの対応が普通すぎたせいで、一般人からしてみれば俺は悪党面スジモだという事実を忘れていた……無念ッ。そ

して、レナの奴には俺から”シシマリマスター”の通称を『えてやる』と思つ。

「レナさん。ジンさん。お弁当……どうしますか？」

「「ありがとうございますっ！」

いやー、ホンマにええ娘さんやー。

もう直角に曲がらんばかりの勢いで俺とレナはイリットからスマナ弁当を受け取ったのだった。

……しかし、この行動といい先日の対応といい、何かレナは他人といつ氣がせんなあ。

「んじゃ、私はナイル爺さんの所でバギー受け取つてくるか」「

「OK。俺はちよつと寄りたい所があるから、後でハンター・オフィス前で合流しよつ

「わかったわ

お互に軽く手を振り合つて別行動を取る。

流れの通り、レナはバギーを修理していたというナイル爺さんの所へ向かい、俺は少しばかり気になる事があったのでガレージを後にした。

昨夜、寝物語とは言つても事後や艶めいた話では無く、本当に寝ながら話しただけだが、レナからこれまでの経緯を聞かされた俺は、ハンターとしてはヒヨコな彼女に協力して行動する事を決めていた。

どの程度の期間になるかはわからないが、暫らくはこの界隈で生活しなければならないのだ。近場で狩りをして稼ぐにも、依頼をこなすにも、人間狩りなどという蛮行をしている勢力を放置したまでは落ち着かない。

それに、俺と同じよう”復讐”と言つたの魔獸マグマを心に飼つているであろう彼女を独りにするのは憚はばかられた。

(……俺みたいに単独でラスボスに挑むような真似はさせたくない  
しなあ)

心の中だけで呟く。

俺は、冷血党クランとの戦いの中で、様々な連中と共に闘した。

時にはヌッカの酒場で同行してくれた気の良い連中と旅をした事

もあるし、クランに敵対するレジスタンスに協力した事もある。

が、如何にゲームのような非常識に満ち溢れた世界とはいえ、クレイジーとしか言いようの無い行動に付き合ってくれるような、ネジの吹つ飛んだ馬鹿には出会えなかつた。

そりゃあ考へてもみてくれ。

より安全に。より効率的にモンスター や賞金首を狩るため、チームは組まれるのだ。

冷血党の賞金首を狩るために共闘するなら、割と多くの賞金稼ぎ達が協力してくれる。

だが、断崖絶壁<sup>ハイ・ウォーター</sup>の上に侵入するためにマスドライバーの射出ポッドに生身で乗り込んで飛ばしてもらおう……なんて自殺としか言いようのない手段にホイホイと着いて来てくれる訳がない。

結果的に俺は単独で……しかも生身で高地のモンスター どもと殺り合う事になつたし、ネツイブ・メラハの攻略も、冷血党の本拠地<sup>クラシック</sup>しかも複数の高額賞金首や真性<sup>グラトノス</sup>の化物までいるという情報をハンターオフィスから仕入れでもしたか、自殺（確かに無謀だ。常識的に考えれば）には付き合えないと断られる始末。

冷血党へのリベンジに燃えるく煮え案山子<sup>クラシック</sup>への連中なら、死を覚悟で付き合つてくれただろうが、あっちの連中は力量<sup>レベル</sup>に不安がありすぎたからなあ……

正直、ドミングスやアルメイダと正面きつて戦えない時点で、ハイ・ウォーターに連れて行くなど論外です。

ま、そういう訳で、究極<sup>魔改造チヨッパー</sup>の相棒を供に独りで何度もネツイブ・メラハに挑む俺には、"自殺志願のハンター"なる通称すら付けられたぐらいだつたさ。

この時ばかりは、今は亡きオズマの爺様が「イヌは良い……」と頻りに主張していたのに同意したくなつたよ。

……俺、イヌ苦手だけどな。顔を舐められるのとか勘弁してください。

それはさておき。

単独でラス、ダン及びラスボスに挑む破目になつた俺だが、実はコートラがグラトノスに拉致されるというイベントが無かつたので、ネットイブ・メラハ周囲の損害を気にせず、當時全力で戦えるようになつた事だけは幸いだつた。

そもそも、俺はグラトノスに殺された後も記憶と復讐心を失わなかつた。

その影響か、コートラとの付き合いが薄かつた俺は、復讐の遂行を最優先に行動してしまつたため、カスミさんの農場と繋がりを持つことも無くなつてしまつた。

結果、ろくでなしどもに、生き返つた死体が農場に出入りしている事を掴まれるイベントが消失。

ついでに、魔犬の爺様オスマのとこで、コートラがグラトノスに攫われるイベントも連鎖消滅。

彼女にとつては幸いなる事に、今でもカスミさんと一緒に平穏な暮らしを営んでいるだろう。

## 話が逸れすぎた 閑話休題

つまり何が言いたいのかといつと、中途半端にリアルなここでは、あらゆるリスクを許容した上で、どんな場所にも主人公に同行してくれるような仲間など、まず見つかる筈が無いという事だ。

無論、同じ意思……この辺りなら、グラッブラーに深い怨恨を抱いており、更にグラッブラーを壊滅させるなら命すら惜しまない、ぐらいなレベルの存在がいたら、そいつは最期までレナに付き合つてくれる最高の仲間になつてくれるだろうけどな。

むう……原作のモヒカン機械工は無理そうだよなあ。確かに家族持

ちだし。無鉄砲女戦士なら可能か？ 確かグラップレーに家族を殺されたんだっけ？

「最低一人は“仲間”を得られるか」

どうやら彼女はスーサイドな経験をせずに済みそうだ。  
心配しそうかと苦笑を抑えながら、俺は目的地へと足を向けた。

そう、今、マドに居るという変人の所へ……

## 04話 むりが一いつ切ちやがま（後編）

Q…あれ？ 何でミンチが来てんの？ つか何でここにいるの？

A…あ……なんでなんだるーねえ

答えりよー。

## 05話 ひくたーみんちに逢いませつ（前書き）

明日は市役所に行かなければ……

忙しいのに気がつけば駄文を投下してしまつw

……それでもメタルマックス系一回つて需要薄いなあ（笑）

## 05話 ひくたーみんちに逢いませう

過去、俺が冒険と復讐の旅をしていた赤茶けた荒野で、それなりに立派な研究室を持っていた自称・電撃蘇生学の権威ことドクター・ミンチ。

ジャッジメントバーーにあつたショッピングモールの廃墟、通称 クライングママにいた頃は、曲がりなりにも研究室と呼べる設備だつたのに、このマドで居を構えているのは、やつつけ仕事で建てられたようなテント。

「……随分と落ちぶれたなあ、爺さん」

ソレを見て、思わず口から零れ落ちた正直な感想にミンチの爺さんは血管を浮かび上がらせながら声を荒げた。

「やかましいわつ！ それより小僧。おぬし生きとつたんか？」「はあ？ 電撃棒で遊び過ぎてボケでも誘発させたか？ この立派に伸びた一本の足を見てみろよ」

「この減らず口といい、赤線入った顔といい……ふむう、本物のようじやの。三年も姿を見せんと思つとつたら、海を越えておつたのか」「……は？」三年？ 爺さん何言つてんだ？」「おぬしこそ何をトンチキな……もしや、蘇生の影響で若年健忘でも発症したか？ それとも外的損傷の再生手術に使つた治験薬に副作用でもあつたんか？ うーむ……」

蘇<sup>俺</sup>生<sup>ミンチ</sup>経験者と狂<sup>ミンチ</sup>科学者は顔を合わせるなり、軽口<sup>ジャブ</sup>の応酬を始める。  
「……このようなやり取りも慣れたもんだが、しかし、はて……三年?  
まさか、こんな事で俺をからかう必要はミンチには無い筈だし、仮にこれが本当の事だとすると、少し困った事になりそうだ。  
具体的には俺の戦車コレクションとか、……三年も連絡無しでガレージに放置されてたら絶対に所有者死亡<sup>の扱いとなつて</sup>回収されるんじゃなかろうか。

「……どうか、あの転送事故……時間すらも越えたとかマジですかアアアー!?

「俺の主觀としては三年も行方不明になつてた憶えなどないんだが……まあいい。因みに俺の戦車達……その、やつぱり?」

恐る恐るといつた感じでミンチの顔を窺う俺に、ハンターの世情には疎<sup>クラン</sup>そうなミンチですら耳にしていたのであらう、いかにも沈痛そうな表情をして、答えてくれた。

「……向こうでは、おぬしはグラトノスや冷血党ナンバーズと相討ちになつて復讐を果たしたという話になつとるよ。まあ死んだ扱いじゃからな……おぬしのコレクションは“英雄”の使つていたクルマという価値もあつたんじやろ? つか……回収されてオフィス直属のハンターに貸与<sup>され</sup>ると、いう噂<sup>じや</sup>」  
「ノオオオオオ——!」

案の定な結末に、俺は頭を抱えて叫んでしまった。

向こうに帰つたら返してもらえるんだるうか。ちくせつ……

「まあ、この際、過去の事は忘れよつ。……で、ミンチの爺さんよ。まさか太平洋を泳いできたなんて話はなかろうし、ビツヤツヒツまで？ てゆーか何でまたこんな地の果てに？」

つーか、それ以前によくもまあ、研究室にあつた品々」と来れたものである。

生活用品とか商道具とか、割れ物注意な脳みそちゃんとか、もう宇宙人の科学かとしか思えない、地球定常波とやらから電力そのものを共鳴給電するらしい導力受信装置とか。アルトネか？ アルトネなのか！？

特に後者の装置とか、もし普及してたんなら、大破壊>以前の世界とか発電所なんて商売あがつたりだつたんではなかろうか。

それともアレか？ 実用化されたら色々と困る連中が出るんで歴史の闇に葬られたとかいう逸話があつたりするのか？

ついつい益体もない事を考えながら、爺さんの反応を待つていて、爺さんは、ふむ……と何ともマツド<sup>ミンチ</sup>らしい鋭角に尖つたカイゼル髭を指で扱きながら腰田する。

「〈大破壊〉前の遺物でな。殆ど知られておらんが、ドッグシステムにインストールする事で、指定座標に直接転送可能になるものがあるんじゃよ。まあ、とある貴重な物質を消費するから気軽に使えんのじゃが……後は衛星端末ブルートートローラーで、ちょちよいとナビ衛星を勝手に使わせてもらつてから人死にが多そうな地域へクルマ」と……とう訳じやな！」

イッヒッヒー！

なんて、一度聞いたら忘れられそうにない笑声を洩らしつつ、とんでもない事を言い出してくれるマッド爺マッド爺さんに思わずハッキングかよ……と咳く。

しかし、良い事を聞いた。その装置なり何なりの情報を聞いて、貴重な物質とやらを集めれば、俺のコレクションを回収する事も可能になるかもしれん……

「あー、ちなみに、その装置？ それかインストールと来るならプログラムか？ パッパーするなり貸してもらうなりできるか？」

「太平洋などと言こ出しそるから、もしゃとは思つとつたが……おぬし、地味にインテリなんじゃな。普通に大破壊前の用語が出てくるとは、意外じやつたわ」

「……つまり、今までは馬鹿そつだと思つてた訳か」

「イッヒッヒー、まあ、そうジジイを苛めなさんな！ して、装置の事じやが……貸し出すのは無理じや。アレはワシの生命線でもあるから。じやが、おぬしにとつては幸いじやつたかもしれぬ。アレは元々、この地域にあつた軍事施設で運用されておつたものじやからのう」

「……とこいつとアシッドキャノン全域を探すのか？」

「すまなんだが、詳しい場所はもう憶えていなくての……流石に30年近くも過ぎると色々と変わってしまうし……む、そういうえば確かにノアへに対する欺瞞工作でドールハウスに偽装されておった筈じや。あーなんじやつたかの……そう、【ヘルメス機関】とかいつ特務部隊が拠点にしつたわい……いやあ、懐かしいのぉ……」

「ちよ、この爺さん、ここいらに来るの一回なんか！」

それにしても【ヘルメス機関】に偽装ドールハウスね……ふむ、どうやら俺にも新しい目標の一つが出来たようだな。

「……おぬしが、そこからvBSテレポーターへを持つてきたり、運用プログラムのほうは、ワシのものからインストールさせてやろ。ああ、ついでに今回も新鮮な死体を見つけたらワシの所に持つてくれるんじやぞ！」

「ちやっかりしてるよ……」

イッヒッヒと高笑いを上げ続けるミンチに軽く挨拶してから、メントの幕をぐぐる。

予想外の所で良い収穫が得られたと、内心スキップするかのような気分で、レナが待っているであろうガレージへと戻る俺だったが

「……あ、その前に、俺専用のクルマ探す必要があるんじゃない  
か！？」

先に気付けよ、と自分に呆れる事となるのだった。

## 05話 ひくたーみたりに逢いました（後書き）

- ・ビーでもいいが、このミンチ……メタルサーガ仕様である。
- ・ヘルメス機関（湖が広がる）なんつや、機関の島 ヘルメツ島
- ・コレクション南無！

〇六話 わあ、狩りごとかけよーー。（前書き）

市役所に行って帰ってきたと思ったら、半ドンで保育園から戻ってきていた姪っこに捕獲されました。ふふふ……幼女の無限の体力には勝てない……ふふふふふ（屍

- ・ボニー＆クライド……もとい、レナ＆ジン。出撃します！
- ・さあ！ モンハンだ！

「よーー！」

「案外早かつたわね」

出来立てホヤホヤ……というより、全損状態から奇跡的な復活を遂げた、といったほうが正しいバギーに乗っているレナに声をかける。

そんな俺に対して、どこから入手したか栄養ドリンクを片手に、あら意外と早かつたのねとばかりに返し、「乗んなさい」とゼスチヤー。

俺も、特に考える事も遠慮もなくナビゲーター・シートに飛び乗ると、レナはエンジンを軽く吹かせてから車を出した。

「で、どこ行つてたの？」

「……ふふふ、それは秘密だ！ と言いたい所だが、何てことはない。ミンチの爺様に挨拶してきただけさ」

「はあ？ ミンチって、テントに住んでて、死体を生き返らせるとか胡散臭いこと言つてる、あの爺さんのことよね。知り合いでったの？」

「胡散臭いのは事実だが……レナ、お前が何に代えても悲願を果たすってんなら、きっと何回かはあるのマジドジジイに世話をなると思うぞ。事実、爺様がクライシングママに研究所構えてた頃は、俺も世話になつた」

うん、変態科学者に身体そのものを魔改造された俺ですら、軽く  
数回は世話になつたんだ。

考えてみれば、よくもまあ研究所まで瀕死のまま辿り着けたり、  
野営中に砲撃ぶち込まれて臓物引き摺りながら、チート極まる大破  
壊前の薬物で失血死とショック死を引き伸ばしつつ車載用<sup>ドックシステム</sup>転送装置  
起動できたり、日本文化を勘違いしているとしか思えない超ヘビー  
級のサイバネ剣豪に「変身」する間もなく、サイバネ秘剣とやらで  
(防御力もクソもなく!) 首チヨンパされて「今度こそオワタ」と  
思うも、運良くイゴールに回収されてたり。

今の実力を手に入れるまで、何回死んだんだろう……つか、こん  
だけ死んでるくせに、我ながらよく<sup>正気</sup>SA/N値が持つもんだ。

「それにしても……よく脳味噌だけ無事で済んだもんだなあ、俺」  
「……とりあえず、爺さんの世話にだけはなりたくないって確信し  
たわ」

「ドン引きだつた……当たり前だが。

「スナザメ狩るわよッ！」

「へいへい」

エル一一四、ハトバ間を結ぶベイブリッジを越える前に、レナはスナザメ狩りを提案した。

理由は……まあ、定番の金欠解消と経験値の獲得。そして名声である。

因みに、金欠に関しては、俺のゴーグルの「ふくろ」に入っている幾つかの装備品やネタを売り払うなり、そもそもが一体どの程度の重量があるのか考えたくも無いレベルに達している金片から捻り出するなりすれば解消は可能だ。

だが、俺はそれをする気は毛頭無い。そもそも、これからグラップラーを壊滅させる力を持つハンターを目指すのに、最初から金銭的な楽を覚えさせても良いことなど何一つないからだ。

非常識にも、依頼達成や敵の撃破といった経験値の恩恵で、地道な鍛錬が馬鹿らしくなるほどに身体性能を向上させるような巫山戯ふさけた世界の住人とはいえ、俺はむしろ地道に積み重ねる小賢しいまでの経験と苦難によって磨き上げるセンスこそを重視する。

最初から高品質の装備で固めて、機械的に積んだ経験値で早々と強さを手に入れてしまっては、弱者が強者に挑むための小細工や、苦境に屈しない精神力を醸成し損なう。

それに、即席で強者となってしまったが故に、弱者の持つ狡さにアッサリと膝を屈する破目になつたり、己を超える強者に対して馬鹿正直に正面から挑むような筋筋思考に陥り易くなつてしまつ。

そういう訳で、俺はレナに装備を貸したり金を与えたりしないの

格納領域

だ！

決して俺がケチな訳ではないぞ！

砂漠……といづよりは、酸性雨と「大破壊」により砂礫化してしまった荒地であろうか。所々に、旧時代の電信柱がまるで墓標のように立ち並んでいる。

日本であったはずなのに、大破壊後の今では乾燥地に成り果ててしまつたとでもいうのだろうか。思い出したように疎らに生えていたタンブルウェイードが寂しそうに風に揺られていた。

「……來たぞ！ クルマに乗つてるとほいえ油断するな！ 下から

突き上げられたら愉快な逆立ちを体験させられるからな！」

「おつけー。副砲コロシクねつ！ 私は回避と主砲に集中するから

！」

「了解だ！」

言葉と同時に、レナが絶妙な加減速とターンでスナザメから程々の距離をキープする。

近づき過ぎてはダメだ。軽量級のバギーでは、スナザメの体当た

りで大きな損害を受けかねない。

だが、遠すぎてもダメだ。距離を離し過ぎればスナザメの分厚い皮の前に、有効打を与えるのが難しくなる。というより、必要以上に距離をとればスナザメはどこかへ去ってしまうだろう。

「オーケー、いい子だ。そりつー、こいつでも喰らいなッ！」

「ユーニットの間接操作ではなく、俺が直接握つて副砲のトリガーを引く。

腹に響く重低音。主砲の射線軸に逃げ道を用意してやりながら適度なダメージを与えるように直撃弾は出さない。

「ユーニットの制御下でなく俺が直接触れている都合上、この世界の人類の意味不明極まる特性により、機銃本体や銃弾に腕力相当分の謎エネルギーが上乗せされる。レベルアナライズ

ハンター オフィス基準の脅威度評価アプリケーションにおいて、俺のレベルは119STR……腕力は457。このクラスの数値に俺自身の戦闘STRから導き出される精密射撃が加わってしまうと、上物の大砲並の威力になってしまう。

となると、近辺のトレーダーに恐れられているとはい、たかがスナザメ程度……実際にアッサリと肉片にしてしまうだろうから。

「ナイスよジン！ いまッ！」

俺の地味な苦労を知らない（知られてはならない）レナが、俺の演出した隙を見事に突き、スナザメの鼻面に強烈な一撃をブチ込む。

たまらず砂中に逃げ込むスナザメ。ゲームでは潜られようが、出でくるまで気にせず戦えた……だが、現実はそう簡単な話ではない。

「あちやー！ 逃げられたかな？」

「どうかな？ クルマから伝わる振動に気を配つてみろ。まだ奴は諦めてないぞ」

そう、まだスナザメは37mm砲を一発もうつただけに過ぎない。人間にしてみれば、強烈なストレートを顔面にもらつた程度だ。

無論、奴はその程度で獲物を諦めるような性格はしていない。

「スナザメは砂に潜られると極めて面倒な相手だ。潜られたらドリル系の兵器で攻撃するのも有効だが……」

俺は、そう言つて戦闘道具袋から、懇意のアーチスト芸術家に用立ててもらつた音響手榴弾を取り出す。

「レッスンだ。サメって生き物は実に様々な知覚器官が人間よりも優れている。その中でも特に優れているのが、聴覚……レナ、耳を塞げ！」

ピンを抜いて放り投げ、ファイバーイヤホンを装着。レナが操縦をユニットに任せ、慌てて耳を塞ぐ。

爆音！

『ギャアアアアアツ』

聴覚から脳を破壊しかねない超音波の爆破裂に、弾き出されるかのように砂上へと跳ね上がるスナザメ。

軽く蹴ることでしナに安全を知らせてから言葉を続ける。

「優れたるが故に、このように単純な音波属性ではない音響兵器で砂から叩きだす事も可能って訳だ。ま、これやつたら逃げようとするから一気に仕留める必要があるけどな

「へー、なるほどね。それじゃ後は……」

「……トドメと行こうかねッー。」

連撃、追撃、乱撃、猛撃！

砂上でもがくスナザメに砲弾と銃弾が、これでもかと撃ち込まれる。

そして、もはや虚めでしか無くなつた賞金首狩りは、その後1分も掛からずにつわりを迎えたのだった。

「スナザメ獲つたど——ツ！！」

「何ソレ？」

「<大破壊>以前から伝わる決まり文句だ！」

〇六話 わあ、狩りでかけよー！（後書き）

実際のサメがスタングレーデとかで水中から飛び出すかと言われば判らんとしか言いようが無いッ！

まあ、この世界ではモンスターハンター的な繋がりでスナザメは音爆弾に弱い……ってことでw

## 〇 7話 いじり合をやめたぜー（前書き）

引き続き今日も掃除と再配置。

冷蔵庫とかクソ重くて腰がイワされやうテス。  
そのせいか文章が地味に荒くて短い、と思います。

- ・レナ、はじめての……
- ・なん……だと？

## 〇七話 いいことをきいたぜ！

スナザメを、ほぼ無傷で平らげた俺達は、スナザメ討伐の証拠映像をエゴーグルで記録すると、ついでとばかりに使えそうな素材がないかとスナザメを調べる。

いかに非常識ワールドとは言え、倒すと死体が消えてアイテムを残すような現象は残念ながらない。実際には倒した後の死体や残骸から使えそうなものを回収する訳である。

そうなると、当然ながら問題が発生する事もある訳で……

「うーむ、使えそうなものは無いな……このサメキバあたりを使って白兵用の武器ぐらいなら仕立て上げられるかもしけんがマトモな素材は期待できんな」

「ええー、ちょっとやり過ぎたかな？」

「あー、まあ、そうだったかもな」

「……肉とか食べられないかしら？」

「生体装甲になってる表皮近辺と機械部分を除けば食えるんじやないか？ サメ肉は大破壊前には栄養豊富で低カロリーと言われてたらしいし……ぶっちゃけ、この小便臭さを処理できるだけの調理の腕があるかが問題だと思うね」

「そーかもね。それにしてもこれ……くっさいわねえ」

ぬめぬめ細胞を始め、バイオモンスターの生体部分を食つて生きているような、逞しき荒野の人々からしても鼻をつまみたくなる臭さ。遺伝子操作でバイオモンスターに変えられた結果、臭いまで強化されてしまったのかと疑いたくなる臭氣には流石に辟易とさせら

れる。

格納領域

「……ヒレの部分だけ小さく切り分けて「ふくね」で保存しておこう。フカヒレの作り方ぐらいなら知ってるから、処理して売ればちよつとした金になるだろう」

「うええ、正直アレを入れたら中まで臭くなりそうなんだけど……「ブチブチ言うなって。一度似たようなことをした事があるが、別に臭いだの混ざるだのといった事はなかったから問題ないさ」

ゲンナリとした表情を浮かべるレナを促して、とつとと切断作業を始める。

とはいって、今のレナの力では相応の武器を使わないとスナザメの表皮には歯が立たないだろうから、その仕事は俺が担当する。レナのやる事は、俺がスナザメを解体している間、邪魔者モンスターが近づかないように警戒することだ。

……まあ、結局その後は特に何事も無く、戦利品を回収した俺達はマドのハンターオフィスまで一旦戻る事になつたのだが。

「うふふ……2000G。山分けしても1000Gかあ……」

「喜ぶのは構わんが、無駄遣いするんじやないぞ？ 1000Gなんて少し何かに使えば消えるような額でしかないんだからな」

初めての賞金首撃破と、ズッシリとした重みに舞い上がっているレナに軽くクギだけは差しておいて、俺はハンター オフィスの担当者と話を続ける。

トリップしているような有様のレナが俺の言葉を、どの辺りまで聞いているかは兎も角、今はこっちのほうが大切だ。

「……で、旧北米<sup>賞金</sup> ジャッジメントバーへ近郊のオフィスに連絡は取れないと？」

「はあ……というより、私どもの利用できる衛星回線網は、日本国内のものだけでして……専門化の話ではノアによるネットワーク破壊の影響ではないかとの事です。まあ、正直な所、似たような質問がく大破壊く後に何度もあったそうですが、私どもとしましては残念ですがどうにも……」

言葉遣いだけは懲懲<sup>いんぎん</sup>だが、もはや対応がマニュアルと化しているような質問だったのだろう。オフィス員の表情は、いかにも面倒そうな様子だ。

考えてみれば、それも当然かもしれないな。く大破壊くで日本国内に取り残された外国人だつて、当時は可也の数だつたらうし、比例して問い合わせも多かつた事だろう。

昔はハンター オフィスという形で無かつたにしても、元・通信会社や様々な情報機関が合体してできたであろうオフィスの者からしてみれば、俺の質問は「どうして今更」としか思えなくとも仕方が無いかもしねりない。

「B5ネットで外国との通信ができないのは分かった。だが、国内の通信環境が生きてるなら、国際転送ターミナルの情報ぐらいは手に入るんだろうな？」

「残念ですが、そこまで詳しい情報は……確かに過去、そのような施設があつたと聞いたことはあります、場所が場所だけに大破壊後の無事を確かめたという話は耳にしませんね。転送ネットワークからも隔離されているようですし、それを求めて大破壊後の荒野を彷徨うぐらいでしたら、いつそ転送装置を長距離仕様に改造でもするほうが楽かもしませんよ？」

まあ、転送装置を改造できるような旧時代の科学に詳しい方が居ればですが。と続けるオフィス員に「役に立たんヤツめ！」と脳裏のベアード様がモワモワさせられたが、無理を言つているほうは俺なので押さえ込む。

やはりミンチの情報に従つまつが一番の近道な気がしてきた。

「……もうその辺りはいい。せめて近場でクルマ入手できそうな情報はないか？」

半分諦め気味に問いかける。

もーどーにでもなあれ！ と言わんばかりの俺だったが、オフィス員は軽く考へるかのような様子を見せてから掌をポンと叩いた。

「ああ、そういえば、マドから東の辺りにあるトレーダーキャンプ

の人が金に困つてバイクを手放したいとか言つていたらしきですね  
「なん……だと？」

思わず劇画調の顔になつてしまいながら呟く。  
オフィス員が知つているようなら、どこかの賞金稼ぎハンターに知られて  
いてもおかしくない。

金で買えるのなら俺としては何の問題も無い。むしろ、素直に金  
で買えることの方が少ないこの時代では、とんでもない良い話だ。  
何気にもんでもない情報を賣したオフィス員に大破壊前の高級酒  
を無理やり手渡すと、俺は未だにトリップ中のレナを放置したまま  
にマドの町を飛び出した。

〇 7 話 いじことをあこがいたぜ！（後書き）

・黒バイは俺のもんだアアア！

そして短距離ならチーター以上の速度で走るケダモノボーイが降臨

（笑）

08話 なんだ「いつなつた！」（前書き）

ねつ、相変わらず文章量が増えない……ていつか短い（汗

・ジン大暴走

・なんでこーなつた！

「ハツハアー！ そ、これだこれエ！」

風を切る感覚と、腰の辺りから伝わってくるエンジンの駆動。メタルマフラーが奏でる重厚な排気音。この地での新たなる相棒となつたストレイドッグのハーレーダヴィッドソンにも似た趣に感動すら覚えつつ、ハイになつた気分を隠しもせずに、マドへ向けてフルスロットル。

文明社会で不自由無く生活し、だが、数え切れないほどの法に雁字搦めと縛られていた影響だろうか。悲しむべき事に、見渡す限りの荒野と成り果てたこの世界で、だがツしかし！ 何に縛られる事も無く愛車を走らせる事ができるという極めつけの開放感。そして爽快感ツ！

ありとあらゆる意味での強さが無ければ屍と成り果てる、弱肉強食の理に囚われたとしても、この自由の前にだけは、全てが無価値となる。

時折、残された前世の残滓が、この無法で暴力的な観念に弱々しい抵抗感を示す……が、殺し殺され喰らい合つ修羅か羅刹の世界を体験した事が、己の純粹さでも奪つたか、もはや中毒的とも言える自由の悦楽の前には無駄というものだった。

ぶつちやけ、ドライバーズハイつてヤツである。

「オラア！ 邪魔だ邪魔だアアア！」

相棒の咆哮に刺激されたか、それとも人類の臭いに排除欲求でも  
刺激されたかは不明だが、行く手を遮るように数体のバイオモンス  
ターが姿を見せる。

だが、知るがいい……今の俺と相棒の目の前に立ち塞がることの  
愚かさを！

自分以外には誰もいない荒野のド真ん中。獲物と俺だけの空間で、  
たぶん俺の口元は猛獸が威嚇するかのような笑みが浮かんでいただ  
け。う。

非武装だが、それゆえに軽い相棒を、踊らせるかのように躍らせ  
る。

ただそれだけで、全ての雑魚どもの攻撃は悉く外れれる。まるで、  
中らない事こそが絶対の運命であつたかのように。

そして、より一層の加速を見せる相棒の上で、何時の間にか構え  
られていた <sup>F2000</sup><sub>タクティカル</sub> SMG グレネードが鮮烈なマズルフラッシュを見せた。

グレネード装着時、5kg 近い重量を持つソレを片手で……それ  
もフルオートの反動を軽々と吸収しながら放たれる死の弾丸が、的  
確にモンスターの急所に叩き込まれ、一切の例外なく消し飛ばして  
いく。

たかだか 4g 程度の鉛弾が、まるで「俺は滑空砲にも負けねーぜ  
！」と自慢げな表情をしているのが感じられそうな理不尽極まる威  
力。

そのような巫山戯た攻撃に、この周辺に出現するような雑魚が一  
瞬たりとも耐え切れる筈も無く、俺がそいつらの横を通り抜ける頃  
にはキレイさっぱりと荒野の肥料に成り果てていた。

「ふはははア……今日も地獄は満員だアア」

後で考えると、何でここまで暴走していたのだろうかと首を傾げんばかりのハイテクションに気付く事も無く……今はただゴール地点をを目指して相棒と共に風となる至福に浸り続けていた。

「……で？ 言い訳ぐらには聞いてあげるわよ？」

「サ、サー セン」

「あ、あん？」

「誠に申し訳ございませんデシタアアア！」

御機嫌極まる新たな相棒を僅かに1000Gで譲ってくれた、スキンヘッドの大男に感謝の念すら抱きつつ、意気揚々とナイル爺さんのガレージへと乗り入れた俺を待っていたのは、金色の夜叉による制裁だった……

トリックしてしまつていたとは言え、知らぬ間に問答無用の放置プレイを味合わされた事が、よほど腹に据えかねたらしい。そんな時に、俺が如何にも御満悦といった様相で戻ってきたものだから、その瞬間にナニカのゲージが振り切ってしまったのだろう。

人外の域に達して久しい俺の剛体が、無拍子かと感嘆せんばかりの見事さで繰り出された、レナの必殺の一撃でリアル犬神家させられてしまったのだから本当に恐ろしい。

荒ぶる鬼神の赫怒には、男がどれだけ強かろうが、男といふ生き物である限り無駄なのだと想い知らされる有様に、俺は無条件でゴッド土下座を披露せざるをなかつたのである。

「いや……な？ クルマ入手の機会を見逃すのはハンターとして問題がある訳でしてね？」

「ウルサイ……少し黙りなさい、ネ？」

ちょっと理由付けをして頑張つてみたが、やはり怒つた女レナが言葉だけで機嫌を直すはずも無く、大人しく貢物を献上する事にする。ダメンズウォーカーなM女レナじやあるまいし、一度ヘソ180°を曲げた女性が男の小賢しい言い訳だけでくるりと態度を変えた例は無い。

こういう時、男のやれる事は悲しいまでに少なかつたりするが、それでも謝罪と貢物と意思表示は確りとやっておくことをお勧めする。

……って、おかしいな？ 俺はレナと男女的な意味で交際している訳じゃないのに、何でこうなった！ 何でこうなった！？

いよいよ混乱の極致に至るうかといつ内面に対しても、あくまでも真面目な顔を崩そうとしないマイフェイス。

そんな顔でスッと差し出された献上物を怪訝な目で見ているレナに、そつと手渡す。

「……何よこれ？」

「ファイバーイヤホンだ。音波耐性が得られると同時に、コードを<sup>i</sup>ゴーグルに接続すれば登録した周波<sup>バンド</sup>帯同士でクリアな遠隔通話が可能になる」

「こんなので誤魔化されないわよ！」と言いたい所だけど……ま、今日はこれで許しといてあげるわ！」

意外な程にあつさりと態度を変え、嬉しそうにファイバーイヤホンを装着するレナ。謝罪の品をスンナリ受け取つてくれたのはありがたいが……なんで嬉しそうにしてるんだ？

ひょっとして……担がれたか？

いや、だが、あの怒りつぶりは本物だつた。

前の世界に横行していた【見せられないよ】どもなら、確実に過剰なレベルの謝罪御遍路と高級埋め合わせコースがセットで要求されかねない。

まあ、そんなヤツは此方としても願い下げだが……ううむ。これは大破壊後の女性がカラリとした性格なのか、レナ個人が後に引き摺らない性格なのか。やはり女性の事は良く分からんな……

それにして、レナに對して資金や装備的な協力はなるべくしない予定だつたが、いきなり例外が出来てしまったか。

ま、これに<sup>ファイバーイヤホン</sup>関してはどのみち必要になる物でもあつたし、特に過剰な支援という訳でもない……うむ。ここは仕方が無かつたとしておこう。そう……仕方が無かつたんだッ！



## 08話 なんだ「う」なつた！（後書き）

- ・ジンは既に調教され始めているようですね（え
- ・オアズケ！ ケダモノには相応しい言葉だよね！

＜戯言＞

我にクリスマスなど存在せぬ……我にあるのは、苦り済ます。すなわち掃除と力仕事と家族サービスのみ！

安西先生……潤いが欲しいです。

口惜しいのでクリスマス外伝など書かぬッ！ 我は書かぬッ（血涙

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5515z/>

---

3 2 R 紅き牙獅子は転送事故に啼く

2011年12月25日17時55分発行